

「救いの達成」

ピリピ2：12—16

堀田修一 21・11・14

「そういうわけですから」：12。つながり、文脈が大切。ピリピ教会が一致する為には、へりくだる必要が述べられ、その為にキリストの驚くべきへりくだりが示された。神であるキリストが人間となられ（クリスマス）、自分を卑しくし、実に私達の罪の為に十字架の死にまでも御父に従われた。この従順こそ、これから述べられる「救いの達成」に関係がある。

I 「愛する者たち（愛情を込めて勧める）、あなたがたがいつも従順（神に）であったように、私がいるときだけでなく、私がない今はなおさら（この時パウロはローマの獄中にいた）、恐れ（畏敬）おののいて（人の恐怖心ではなく、救いを与えられる神を神として崇め神を恐れ敬う心。へりくだる。罪を軽く見ず、罪を隠さず、ごまかさず神に告白し悔い改める）自分の救いを達成するよう努めなさい（成し遂げる、遂行）」：12。この御言葉を文脈や聖書全体から切り離して私的解釈をしてはならない。これは決して自力救済を命じているのではない。それは不可能！この勧めは、教会の中にある不一致という問題の解決につながって述べられている。しかもこの勧めに続く13節で明確に「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です」と言われている。救いには、三つの段階がある。

①神が救いを私達に与え始められる瞬間を意味する第一の面。霊的に死んでいた私達が新しく生まれる新生、聖霊の内住。聖霊が与えられる信仰による義認。これは神の大きな恵み。主を信じる志も神が与えて下さった。私達が主を信じる事は最高の神による奇蹟！栄光は神に帰す。

②神の救いの働き継続という第二の段階（主を信じ救われている私達は今、この段階にいる）＝主の姿に聖められ変えられ続ける聖化においては、私達キリスト者自身が、神の聖化のみわざ（救いの達成）に参加できる、私達の方がある→自分の罪、憎しみ、不品行、偶像を隠さず、神に告白し、主イエスの血の恵みで完全に赦され、聖められ、内住の御聖霊に拠り頼み、信頼できる人に祈ってもらい、罪から離れ、素晴らしい神に近づき続ける。いのちの御言葉で養われ御言葉に御聖霊の力で従う。そういう意味で自分の救い（主の姿への聖化）の達成に努める。そして、その努める行為でさえ、神がさせて下さる→「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志（原語：意志、意欲。教会に行きたい。主を信じ、洗礼を受け、神が喜ばれる事を見分け選び取り、主の姿に聖められ続けたい）を立てさせ、事（主を信じ聖化の達成に努める行為）を行わせてくださる方」：13。私達は、神（いのちの御言葉）に従い神と共に働く。私達の心の志が、すべて神からのものとは限らない。自分の志や悪魔からの志もある。それ故に、自分の心の志が、神のみこころにかなうものか見分ける為に、次の4つが役に立つ。
i 神に聞く祈り。 ii みことば。 iii 置かれている状況。 iv 主に信頼している人の助言。 ※私の人生で、主のみこころに適う志を今、記した4つを結び合せ確認した証し。どの教会で奉仕すべきか。御心の判断。

③そして主の再臨の時、救いの完成という救いの第三の段階＝栄化、救いの完成、主の栄光の同じ姿に変えられる（3：21）恵みが成就する。ハレルヤ！※使徒信条「身体（からだ）のよみがえり（主の再臨の時の救いの完成）を信ず」。今、天で礼拝しているのは、天使達と天に召された神の民の霊、魂。

II 12節の「自分の救い」の原語は、「自分達の救い」。個人個人が主の姿に聖化される面だけでなく、自分達＝教会が主にあって一致して一つとなり教会全体でも主の姿に聖化される救いを達成する事に努める。神の御心は、主の教会がキリストのからだとして調和し、一致を保つ事（エペソ4：3）。神は私達一人一人に働かれると同時に、教会全体にも働かれる。自己中心や虚栄心、高ぶりを捨て、主にある一致を保つ志を立てさせ、一致を保つ事を行わせて下さる。「すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい」：14。つぶやかず＝原語：不平でぶつぶつ言わず。自己中心や空しい誇りから不平を言ったり、つぶやかず、主の姿に似せられ、聖化される救いの達成に努める。主にある一致を保つ。つぶやきへの勝利の秘訣→常に主の恵みを数え感謝する。※証し：試練があっても、約43年の伝道牧会と教会が支えられ、神による成長を体験させていただいた恵み、主から与えられた秘訣＝主の恵みを数えての感謝、賛美。「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな」（詩篇103：2）。最近も妻との確認。つぶやき、不平の心のスイッチを押す代わりに、主の恵みを数え感謝のスイッチを意識的に押す時、境遇ではなく、私達の心が変わられ、人生は変わる。「むしろ感謝しなさい」（エペソ5：4）。試練の中でも、ノートに主の恵みを数え、記し続ける恵み。私の宝の時間。疑わずに＝原語：論争せず、争わず。自己中心、頑固なこだわりで争う事をせず、主の姿に聖化される救いの達成に努める。争いへの勝利の秘訣→まず神様に祈る、心を静める。「怒ったり、言い争ったりすることなく、どこでもきよい手を上げて祈るようにしなさい」（Iテモテ2：8）。祈りを積んで、時満ちて、主を中心に、交わり、愛をもって真実にお互いの言葉を聞き合い、語り合う。主の十字架のへりくだりと愛を感謝し、互いに、おわびし（お互い完全な者ではないと認め合う※証し）、和解する。

III 救いの達成に努める目的。自分達だけが救われれば良いのではなく、世の光として輝き、世に神を証しする為。「それは、あなたがたが、非難されるところのない（主の御言葉に養われ主の姿に変えられ続け）、純真な（悪に染まってない）者となり（内住の御聖霊と御言葉により聖められ続ける事により）、また、曲がった邪悪な世代（時代）の中にあって傷のない（主の十字架の血と御聖霊により罪を聖められ続け）神の子ども（神に愛されている）となり、いのちのこことばをしっかりと握り、彼ら（救われて欲しいと神が願っておられる人々）の間で世の光として輝くためです」：15, 16。主は、私達を世から救い出され、私達を愛し身近に置き（マルコ3：14）満たされ、再び私達を世に御自身を証しする世の光として遣わされる（ヨハネ17：18）。「彼らの間で世の光として輝くためです」：16→不品行と曲がった邪悪な罪の世の誘惑は強い。私達は聖さを失い、かえって世の悪の影響を受け易い。だからこそ、「いのちのこことばをしっかりと握り（原語：しっかりと捕まえる、堅く保持する、心を向ける、注目する）」とある！これこそ最高の秘訣。聖書の御言葉は、ただの規律や道德の書ではない。旧新約聖書のみことばは、素晴らしく、生きていて、いのちがある。世に出かける、世に遣わされる前に、一日のどこかで、礼拝メッセージや毎朝のデボーションでいただく、聖書のいのちのみことばにより、私達の心に神のいのちの息が吹きかけられる。私達は、御言葉を読むたびに、神の霊的ないのちの息を吹き込まれ強められる。「聖書はすべて、神の靈感によるもの（直訳：

神のいぶきによるもの)で、教えと戒めと矯正と義の訓練(主の姿への聖化という救いの達成)とのために有益です」Ⅱテモテ3:16。聖書は、神のいぶきがかかっている、生きていて力と命がある。※証し:友人へのはがきに記したみことばの励まし。「金銭を愛する生活をせずに、今持っているもので満足しなさい。主ご自身が『わたしは決してあなたを見放さず、あなたを見捨てない』(ヘブル13:5)。聖書のいのちのみことばを日々、御聖霊に頼り読み、しっかり握り生きる時、私達の心の中にいのちの御言葉の光が満ち、それが外に現れ、世にあって、神を証しする世の光(主の光を反射する)として輝かせていただける。試練の中でも、主の恵みを数え、感謝しつつ歩める。主の恵みを感謝する姿は、そのまま、主を証しする姿となる。主を信じる人生は、試練の中でも希望と感謝の生き方を生むのだろうか。※証し:ある方の思いがけない言葉。

祈り:神ご自身が、救いを始められ、命のみことばにより救いを達成させて下さる恵みを感謝します。つぶやき、不平不満の人生ではなく、主の恵みを数え神と人に感謝する人生に変え続けて下さい。